

名古屋市 西部地域療育センターだより

正面壁画「友情」より

No. 33

平成27年度 西部地域療育センター連続講座（平成27年6月26日） 発達障害児の理解と支援・指導 ～“ほめて育てる”の観点から～

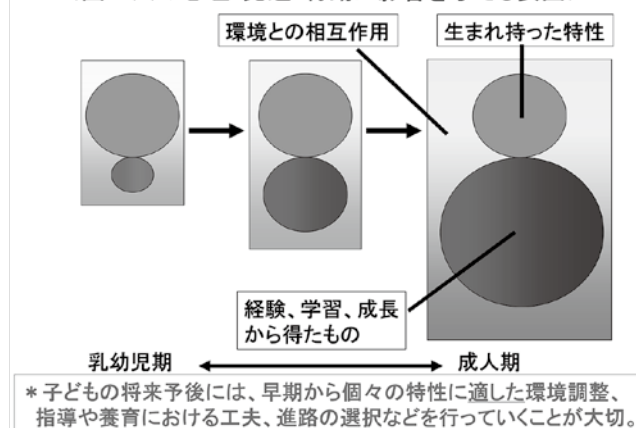
名古屋市西部地域療育センター 宮地 泰士 所長（小児科医）

1 発達障害児とその支援

人の心理や行動は、①生まれ持った特性、②経験や学習など成長とともに後から身につけた知恵や技能、③生活している環境要因、の相互作用によって定まっていくことが知られています。ここで言う“環境要因”とは、その人を取り巻くありとあらゆる状況や条件（生活している場所の物理的条件、周囲の人の関わりや指導、与えられた役割や課題内容、地域や国の伝統・文化・経済状況など）を指して言います（図1）。ただし、このような3つの要因の相互作用はその人の年齢によって様相が異なります。成人の場合、経験や学習などによって後から身につけたものの影響は大きいですが（図1右）、幼い子どもは、まだ経験も学習も少ないので、その人（子）の行動に最も強く影響を与えるのは、生まれ持った特性であると言えます（図1左）。近年話題になっている発達障害とは、生まれ持った

特性についての診断名ですので、診断を行う際には影響を最も強く受けている幼少期の行動や発達の特徴が重視されます。また、もう一つ大切なことはその人の将来予後（生活や社会への適応状況）は、その後の経験やどのような環境で生活しているのか等による影響が大きくなっていくということです。したがって、子ども達に対しては、早期からその子の特性を正しく理解し、その子に適した指導や環境の提供を行っていくことが大切です。

＜図1: 人の心理・発達・行動に影響を与える要因＞





発達障害の種類については、知能を中心とした全般的な発達が遅れることにより生活適応が困難である精神発達遅滞（知的発達症）、知的発達の遅れによるものや学習経験が乏しいわけではないのに読字・書字・算数能力のいずれかに特異的な困難を生じる学習障害（限局性学習症）、全般的な発達の遅れによるものや麻痺などによるものではないのに不器用であったり身体動作や姿勢保持などに困難さを生じたりする発達性協調運動障害（発達性協調運動症）、様々な場面において不注意や多動・衝動性による支障をきたす状態が続く注意欠如多動性障害（注意欠如多動症）、言語発達や会話などのコミュニケーションが困難で、見通しを立てたり状況や他者の真意を察したりするのが困難であり、“こだわり特性”（ルールやパターンに固執する、興味が限局し没頭する傾向がある、感覚過敏や鈍麻がある、感覚的嗜好性の強さや常同行動など）を3主徴とする広汎性発達障害（自閉スペクトラム症）などがあります。

これらの発達障害を持つ子ども達の成長・発達には、それぞれの特性に対する個別の補助的条件が必要となります。例えば、言語理解が困難な傾向を持つ子にはできるだけ具体的な指示

を1つずつ伝えることや、言葉だけでイメージするのが苦手なことに対して絵や写真、しぐさや目印、手本などの視覚的教示を併用して理解を促すことが大切になります。また、気が散りやすい子や課題に集中し続けるのが困難な子には、気が散る要因の排除や集中しやすい環境調整（座席の配置の工夫や集中・注意を促すこまめな声かけなど）が必要となります。課題の遂行や集団生活における何らかの苦手（困難）が

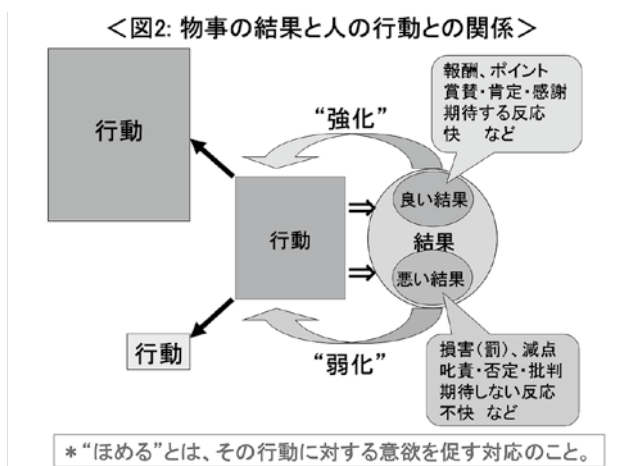
ある子については、その苦手（困難）なことに対する補助が必要です。しかし、このような個別の補助的条件がないと失敗や挫折体験、注意や叱責を受けることなどが繰り返され、本人の意欲や自己肯定感が損なわれていくばかりか、思うようにいかない苛立ちや周囲との関係不調や孤独感などから新たな問題（二次障害）を引き起こしてしまう可能性が高まります。つまり、発達障害児とは、その子が最適な成長・発達をしていくために、独特の発達特性に適合した環境要因（周囲の理解や補助の有無など）の調整と、本人自身の適応力を向上させるための療育や指導上の工夫を行うことの必要性が高い子なのです。

2 “ほめて育てる”の準備

さて、近年では子どもの教育や養育についての関心は高く、様々な考え方や方法が提唱されていますが、その中でも特に子どもを“ほめて育てる”ことの大切さが注目されています。そこで今回は、“ほめて育てる”ためのポイントについてお話したいと思います。

そもそも“ほめて育てる”という考え方は、物事の結果と人の行動との関係が図2のようになっているという理論に基づいています。人が

ある行動をとると、必ずそれによる何らかの結果が生まれます。その結果が本人にとって“良い結果”であれば、それをもたらした行動はより強化され繰り返されることになり、逆に“悪い結果”であれば、それをもたらした行動はより弱まり（弱化され）減少していくであろうということです。注意すべきは“本人にとって”という点です。しかし、一般的に“ほめる”とは、それをもたらした行動を強化していく“良い結果”のことであり、逆に“叱る”とはそれをもたらした行動を弱化していく“悪い結果”と言えます。また、“ほめる”と言うと「いい子だね。」とか「えらいね。」といった賞賛の言葉がけがまっさきに思いつきますが、肯定的な反応や感謝、微笑みを返すなど、相手が心地よく感じ、それをもたらす行動を「またやろう」と思うような対応全般を指して言います。



次に、子どもをほめることができるかどうかは、実は指導する側の状態や考え方、子どもに対する理解の仕方が大きく影響します。子どもは大人と違って未熟な面もあるし、子ども独特の面もあります。そのような子どもの立場に立った理解は子育てや指導において必要不可欠です。例えば、何か失敗をした子が「僕やってないもん！」と思わず訴えた時、“僕”という言葉と“やっ

てないもん！」という言葉の間に“わざと”という言葉がうっかり抜け落ちてしまったことに気づいてあげられるでしょうか。兄が遊んでいるのを邪魔した弟と喧嘩した時、兄の気持ちについては何も言及せず、「お兄ちゃんなのに！」という気持ちが先に立って、つい兄だけを責めるような対応になっていないでしょうか。「係の仕事ができて勉強ができなければダメだ」というように、指導者の期待する項目だけでしか子どもの成長や長所を評価しないなどということとはしていないでしょうか。

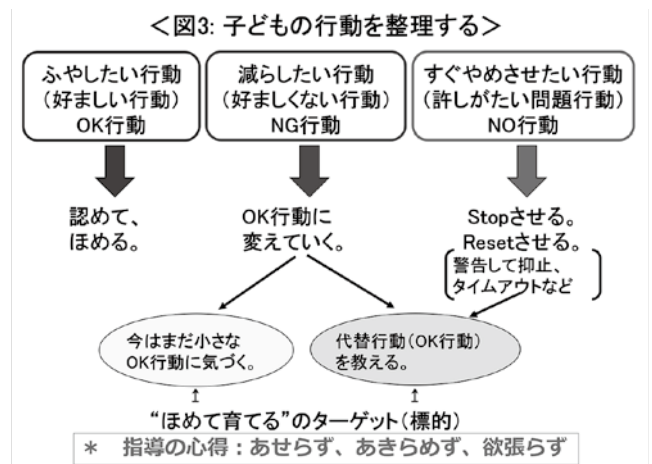
臨床現場では、「この子の長所が分かりません。」という悩みを聞くことが時々あります。その際に思い出していただきたいのは、人の長所は他人より秀でたものや、がんばっていることだけとは限らないということです。むしろ、がんばっていることは、意欲はあるが、がんばらないといけない（努力しないといけない）という意味では必ずしも得意なこととは限りません。このように考えると、その子が普段あたりまえのようにやっていること（努力を必要とせずやっていること）というもののこそ、その子にとって得意なことであると言えるのではないのでしょうか。朝は自分で起きる、あいさつをする、ご飯をしっかり食べる、学校に元気に行く、笑顔をよく見せる、「手伝って」というと手伝ってくれる、などなど、本人も、あるいは周囲の者もあまりに自然に、日常的に行われているため、それが長所だとは気付かずに過ぎていくことがよくあるのです。また、時々やっていることや少し促すとやれることはどうでしょうか。確かにあまり意欲があるものとは言えませんが、条件やタイミングがそろえば意外とスムーズにできてしまうのであれば、それも実はその子

の長所なのかもしれません。つまり、“時々しかやらない、促さないとできない”と、その子の“できないもの”を増やす考え方ではなく、“時々ならやれる、促せばできる”と、その子の“できるもの”を増やす考え方をしていくと、「この子の長所が分かりません。」という悩みは解消していくのではないのでしょうか。いずれにしても“ほめて育てる”ためには、我々自身が人の長所に敏感であり、物事を前向きにとらえる癖を持つことが大切なのだと思います。

3 “ほめて育てる”の実践

それでは、“ほめて育てる”ことの実践について話をすすめていきます。まず、図3に示すように、子どもの行動を①増やしたい行動（好ましい行動）：OK行動、②減らしたい行動（好ましくない行動）：NG行動、③すぐやめさせたい行動（許しがたい問題行動）：NO行動の3つに分類していきます。この時の注意点は、いずれも具体的な行動（〇〇する）と表記し整理することです。つまり、「やさしい」ではなく「困っていると「どうしたの？」と声をかける」、「なまける」ではなく「宿題の時間に遊んでいる」、「いじわる」ではなく「弟に自分の玩具を貸すことを拒む」といった調子です。指導や評価の対象はその子の行動ですので、どのような状況におけるどのような行動なのか具体的に整理する必要があります。3つに分類できたら、それぞれの行動に対する対応が定まっていきます。OK行動はこれからもどんどん増やしていきたい行動ですので、“ほめて”強化していくことになります。また、NG行動はOK行動に変えていけるように指導していくものとなります。その際には2つの方法があります。1つは、今はまだ小さなOK行動を大きくしていく方法であり、もう1

つはNG行動の代替行動（OK行動）を教えるという方法です。NO行動については速やかにやめさせ気持ちをリセットさせる必要があります。そして、代替行動（OK行動）を促していくことになります（図3）。



小さなOK行動を大きくするとは、総合的あるいは結果的にはNG行動であっても、その中に小さなOK行動が見つけれられた場合の対応です。例えば授業の中盤にさしかかると集中が切れてゴソゴソしてしまう子がいたとします。しかしそれは、授業の前半まではそれなりに集中していたとも言えるわけで、前半部分の行動はOK行動であったことになります。この前半のOK行動が少しでも長く持続するためにはどのような指導をするとよいのでしょうか。授業時間の真ん中あたりで「あと残り半分もがんばろうね。」と励ますことや、軽く休憩や気分転換を図るような工夫をして、集中力の回復を図るという方法も考えられます。また、「遊びはおしまい。片付けなさい。」と言ったら、怒りながら玩具を玩具箱に投げ込むなどして乱暴に片付ける子がいたとします。そのような時、すぐに「乱暴な片付け方はやめなさい！」などと叱るのは非常にもったいないことです。おそらくその子の心の中では、「もっと遊びたい！」という気持ち（NGな

気持ち」と「片付けなければならない」という気持ち（OKな気持ち）とが葛藤をしているのでしょう。そんな時、指導者がNGな気持ちだけに注目し、子どもの行動を批判（否定）したらどうなるのでしょうか。その子の心の中にあるOKな気持ちは認められないことで萎えてしまい、怒りを伴ったNGな気持ちが勢いをつけてしまうのではないのでしょうか。したがって、まずはその子が片付け始めたこと（NG行動の中に含まれている小さなOK行動）について“ほめる（肯定する）”ことが大切です。そして、その後に「ゆっくり片付けてくれると、もっと嬉しいな。」とか「玩具を箱の中に置くように入れてね。」と追加注文（お願い）するのがよいのではないのでしょうか。その注文（お願い）がNG行動（乱暴に片付ける）の代替行動（OK行動）を教えるということであり、それに子どもが応えてくれたら、またさらに“ほめる”ことができ、最後に「きれいに片付いたね。」と、3回も“ほめる”機会が生まれます。



す。しかし、その行動の中にはNG行動があります。その場合我々は、NG行動で自分の思いを叶えようとすることは間違っていることを子どもに伝え抑止しようとしします。しかし、それだけの対応に終始していると、その子の思いは行き場を失い、反発が強まったり新たな問題が発生したりする危険もあります。NG行動をとってしまう子、つまり“困った子”は、自分の思いを叶えるためのOK行動が分からなかったり上手いかなかったりして“困っている子”なのではないのでしょうか。だとすると我々が教えるべきことは、その子なりに思いついてやってしまったNG行動をただ否定するのではなく、「どうしたらよいのか」つまりOK行動は何かを丁寧に教えることではないのでしょうか。そしてそのためには、その子がどのような思いでその行動をとるのかを理解（共感）する必要があります。また、どんなに良い教えであっても、実際にやってみないと自分のものにはなりません。したがって、子どもへの指導においては、その子に教えたOK行動を、その子がやりやすくなるための協力（環境整備や手伝いや同行など）をする必要があります。例えば、友達の玩具を黙って取ってしまう子に対して、「貸して」と言うのだよ。」と教え、

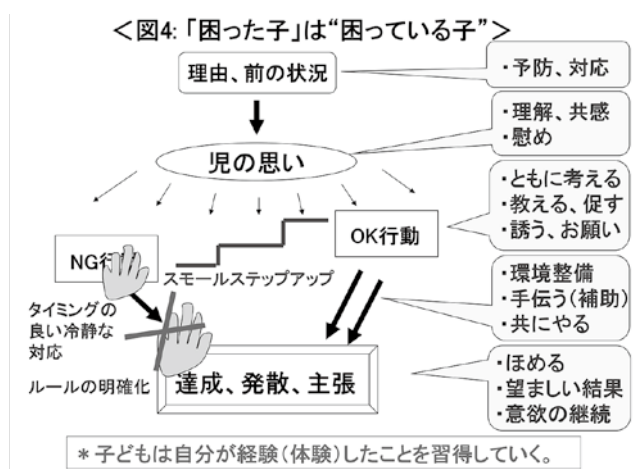


図4に示すように、子どもは自分の思いを達成したり発散したり主張したり（分かってもらいたかったり）するために様々な行動をとりま

実際にその子が「貸して」と言えるようにそばについてあげたり、タイミングよく促してあげたり、時には相手の子に「ちょっと、貸してあげてね。」と援護してあげたりしていくことが大切です。そうやってできたOK行動を“ほめる”と、その子はOK行動で自分の思いを叶えることを経験し、それを積み重ねていくことで自信をつけ、自発的にOK行動で目的を達成しようと行動できるようになるのです。

また、補足すると、NG行動に対する抑止については早期介入が重要です。NG行動の予兆のようなものや初期段階に対応せず、問題が大きくなってから慌てて抑止しようとする、なかなか収拾がつかないばかりか、結局子どもを叱ってしまうことにもなるでしょう。そして子どもの側も素直になれず、失敗・挫折体験としての記憶だけが残し、NG行動だけがその子の脳裏に印象強く刻まれていくことになります。さらに、問題解決にむけての対応の遅さは、周囲の他児にとっても生活における安心感を失い、NG行動をとってしまった子を敬遠したり批判するようになっていたりすることがあります。特に同じようなトラブルが繰り返し起こっていたり、問題が深刻化したりこじれたりする可能性が高いことが分かっているのであれば、問題を最小限におさえる早期介入や予防的対応は必要不可欠であると思います。

一方、子どものNG行動への対応として、よく“無視をする”ということがよいと言われることがあります。しかし、無視をしてNG行動をやめていく子はその対応でよいのですが、逆にエスカレートしてしまう子もいます。実は“無視”とは“感情的な反応を示さないこと”という意味であると解釈していただきたいと思います。

したがって、極めて冷静な口調で（ここが肝心）、子どもにやってほしいOK行動や、NG行動が好ましくないことを伝えても良いと思います。ただし、そのような言葉がけは必要最小限の量で、口調はもちろん声かけのタイミングも注意すると良いと思います（表1）。また、無視の意味理解がまだ難しい子やお互いの交流関係が不十分な場合はこの対応の効果は薄いです。その場合には、まずは良好な関係作りを優先し、NG行動に対しては予防的対応で臨むことが中心になるかもしれません。そして、NG行動が止まったらもちろん“ほめて”ください。このように考えると、“無視”とは“ほめる”ために待機している状態と言ってもよいのかもしれません。

＜表1: NG行動に対する正しい“無視”の仕方＞

- ・NG行動が始まったら“無視”を開始。
 - ・OK行動(してほしい行動)を伝える。
 - ・必要に応じてNG行動が好ましくないと思うことを伝える、あるいは適度に制止する。
- ※“無視”の最中の言動はトーン低め(冷静)で、ゆっくり、はっきり、手短に。
※“無視”の最中の言動のタイミングには注意する(子どもが一息つく時、感情のピークを越した時)。
- ・NG行動が止まったら簡潔にほめる。一連の事が無事終わったらしっかりほめる。

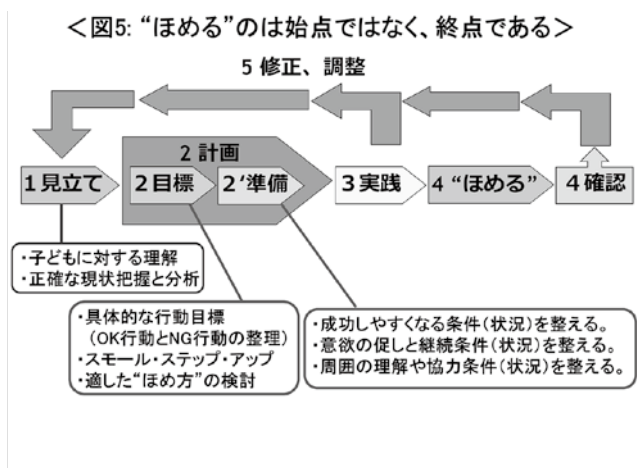
* 正しい“無視”とは、ほめるために待機すること。

なお、発達障害児がOK行動をできるようになるためには、先述のような個別の補助的条件を必要としていることがあります。その子の特性に合わせた対応の工夫や補助、環境整備などを行い、その子の成長のペースに合わせて、時にはスモールステップアップでOK行動を支援し、育てていく必要があります。

4 “ほめて育てる”の補足

“ほめて育てる”ためには、子どもについての十分な理解と指導計画に基づいて、子どもが“ほめられる”行動ができるように工夫することが

何よりも重要です。実は、“ほめて育てる”の“ほめる”とは、事の始まり（始点）ではなく、それまでに準備し施した結果なのです。別の言い方をすれば、“ほめて育てる”とは、子どもがほめてあげられるようになることをただ待つような受身的な対応ではなく、“ほめてあげられるようになることを目指した、子どもに対する能動的な援助”なのです（図5）。



最後に“ほめて育てる”ことについての補足をしておきたいと思います。

まず、何等かの目的（目標）を定めて実施したことは、本当にその方法で良かった（子どもが良い方向に向かって成長している）のかどうかを確かめなければなりません（図5）。そして、もしそうでないのなら、あるいは必要であれば修正を加え、よりその子に適した方法になるように改定（バージョンアップ）していくことが大切です。また、子どもの成長とともに新たな知恵や技能を教えていくことも大切です。例えば、最初は黙って友達の玩具を取ってしまう子が、「貸して」と言えるようになると、次は「ダメ」と返事する相手に対する対応（いったん他のことを楽しみ、後で再び借りに来るなど）を憶えないといけない、といったようになります。さらに、子どもが高学年になっても幼い頃と同じ対応で

はふさわしくありません。自分でOK行動を考えることを促したり、“ほめ方”もさりげなく、あるいは感謝や一緒に喜ぶといったものの方が、子どもも受け入れやすかったりします。また、OK行動も1つしかないわけではないので、その子らしいやり方を優先していくことも大切です。このように、“ほめて育てる”ことそのものを“育てていく”ことが必要です。

また、“ほめ方”がその子に適していなかったり、その子が教えられたOK行動をとることを不本意に感じていたり、“ほめられる”ことに慣れていなかったりする場合、いくら“ほめて”も子どもが喜ばなかったり逆効果になってしまったりすることがあります。指導するということは、指導者の考えに従わせたり指導者のやり方を押し付けたりすることとは違います。養育者や指導者の方には普段から子どもとの良好な交流を育み、その指導が誰のためでもないその子自身のためになるように、その子らしいやり方を、その子と一緒に模索し、その子と一緒に成長を喜ぼうという気持ちを常に忘れずにいてほしいと思います。

※本論を作成する際に、当日の講演内容や図表の一部を修正しました。ご了承ください。

平成27年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

第2回 講演会

幼児期の発達を支援するために ～それぞれの立場から～Ⅱ

日 時 平成27年11月20日（金） 午後3時30分～5時
会 場 西部地域療育センター1階 多目的ホール
対 象 保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

～ 内 容 ・ 講 師 ～

「不器用な子どもたちへの支援～鉛筆や箸の使い方指導の実際～」

西部地域療育センター 作業療法士 近藤 久美

平成19年7月の連続講座では、スプーンや鉛筆の持ち方指導のお話をさせていただきました。あれから8年、作業療法では、不器用なお子さんたちに対して、ひらがなが書けるように、箸で食事が出来るようにと日々支援を続けています。今回は、ひらがなは読めるのに、なかなか書ける様にならないお子さんたちへの支援、就学前になってもエジソン箸などしつけ箸から卒業できないお子さんたちへの支援を紹介します。

「“移行対象” とは何でしょう？

～幼児が成長していく時に“おもちゃ”や“遊ぶこと”が果たす役割～」

西部地域療育センター 心理担当 堀部 文男

移行対象（transitional object）とは、例えば幼児が持ち歩く毛布のようなものです。スヌーピーのお話に出てくる甘えん坊のライナスの毛布です。ぬいぐるみなどの玩具がその“役割”を果たすことがあります。それはどんな“役割”でしょう？ 幼児が成長していくときに、“玩具”や“遊ぶこと”が果たす役割を考えていきます。当日は、絵本「いもうとのにゅういん」と「こんとあき」（いずれも福音館書店）に出てくる、主人公とぬいぐるみの“関係”を題材に理解を深めて行きたいと思っています。参加される方は事前に読んでおいてください。

ボランティア募集

保育場面での手助け（室内の活動、園外への散歩など）
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事（運動会、夏祭りなど）のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■

名古屋市西部地域療育センター

名古屋市西部地域療育センターだより 第33号

発行日 2015年10月

編集・発行 名古屋市西部地域療育センター

〒454-0828 名古屋市中川区小本一丁目20-48

Tel. (052) 361-9555 Fax. (052) 361-9560



この機関紙は古紙/パルプを含む再生紙を使用しています。